

氏名	板 寺 英 一
授与した学位	博 士
専攻分野の名称	医 学
学位授与番号	博乙第3112号
学位授与の日付	平成9年6月30日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則第4条第2項該当)
学位論文題目	Long-term results of open reduction for residual subluxation in congenital dislocation of the hip : a new open reduction method involving 360° circumferential capsulotomy (先天股脱の遺残性亜脱臼 に対する広範囲展開法の長期成績)
論文審査委員	教授 清水 信義 教授 田中 紀章 教授 村上 宅郎

学位論文内容の要旨

先天股脱治療後の遺残性亜脱臼は関節包後方部分、坐骨大腿靭帯、および外旋筋群を解離しなければ完全な求心位が得られないこと、また、われわれの手術法を用いれば遺残性亜脱臼に対しても臼蓋に対する補正手術を併用することなく良好な成績が得られることを証明するため、遺残性亜脱臼に対して広範囲展開法で関節包を全周切離して観血整復した症例群(A群)と関節包の後下方部分を解離せずに観血整復した症例群(B群)の長期成績を比較検討した。調査時のCE角の平均は、A群22.5°、B群16.0°であり、A群の成績が優れている。Severin分類による成績は、A群では73%が成績良好群(I群またはII群)であった。これに対し、B群では42%が成績良好群であり、A群の成績に劣る。本研究から遺残性亜脱臼に対しても後方部を含む関節包の全周切離が重要であることが示された。また、本法の成績は満足すべきものであり、過去に報告されている寛骨骨切り術の成績に劣るものではなかった。

なお、本論文は共著論文であり、共著者の協力を得て完成したものである。

論文審査結果の要旨

本研究は先天股脱治療後の遺残性亜脱臼は関節包後方部分、坐骨大腿靭帯及び外旋筋群を解離しなければ完全な求心位が得られないこと、また、われわれの手術法を用いれば遺残性亜脱臼に対しても臼蓋に対する補正手術を併用することなく良好な成績が得られることを証明するため、遺残性亜脱臼に対して広範囲展開法で関節包を全周切離して観血整復した症例群(A群)と関節包の後下方部分を解離せずに観血整復した症例群(B群)の長期成績を比較検討したものである。調査時のCE角の平均は、A群22.5°、B群16.0°で、A群の成績が優れている。Severin分類による成績は、A群では73%が成績良好群(I群またはII群)であったのに対し、B群では42%が成績良好群であり、A群の成績に劣る。本研究から遺残性亜脱臼に対しても後方部を含む関節包の全周切離が重要であるとの知見を得、寛骨骨切り術の成績に劣るものではないとして価値ある業績であると認める。

よって、本研究者は博士(医学)の学位を得る資格があると認める。